

トルとモツの意味分析

— 「手にする」と「自分のものにする」の 意味概念を中心に

ミー スワン モンシチャー

◆要旨

トルとモツは非常に多くの意味を持つ語であり、その多義性は国語辞典の意味記述を見ても明らかである。そこで、本稿では、考察対象をトルとモツの複数の意味の中から最も基本的であると思われる意味「手にする」と、基本的意味から派生した、類義関係にある二番目の意味「自分のものにする」に限定し、その意味分析を行う。分析の結果、トルは「自分の領域へ移動させる」ことに焦点があるが、モツは「状態を継続的に維持する」ことに焦点があることが明らかになった。トルは元あった場所から自分の領域へ物理的に、自分のものにする領域へ抽象的に移動させることであるが、モツは手にした状態、自分のものにした状態を継続的に維持することである。

◆キーワード

トル、モツ、意味分析、手にする、
自分のものにする

◆ABSTRACT

The purpose of this paper is to describe the meanings of *toru* and *motsu* focusing on the semantic concept of “hold” and “own”. The results revealed that while *toru* focused on the concept of “moving to a domain of one’s own”, *motsu* placed an emphasis on the concept of “maintaining a continual condition”. Furthermore, *toru* represented the concrete meaning of moving from the original location to one’s domain as well as the abstract meaning of moving to one’s own domain in the sense of ownership. Meanwhile, *motsu* demonstrated the maintenance of a holding state and ownership status.

◆KEY WORDS

toru, *motsu*, semantic analysis, hold, own

A Semantic Analysis of
Toru and *Motsu*
Focusing on the semantic
concept of “hold” and “own”
MEESUWAN MONSICHA

1 はじめに

本稿では、考察対象をトルとモツの複数の意味の中から最も基本的であると思われる意味、また、基本的意味から派生した、類義関係にある二番目の意味に限定し、その意味分析を行う。ここで基本的意味とするのは「本を手にとる／もつ」のように「手にする」という意味である。また、基本的意味から派生した、類義関係にある二番目の意味は、「博士号をとる／もつ」のように「自分のものにする」ことを表すものである。この意味は、トルとモツが類義関係にあり、辞書類において基本的意味である「手にする」の次に、二番目に記述されている。なお、「手にする」と「自分のものにする」の意味概念の区別基準については、主体が具体的対象を物理的に保持することに注目するものを「手にする」、具体的・抽象的对象に関係なく、主体が抽象的空間で対象を所有することに注目するものを「自分のものにする」とする。

2 先行研究及びその問題点

トルとモツの主な先行研究には、国広（1997）及び類義語辞典における意味記述がある。国広（1997:226-234）では、トルの現象素を「どこかに置いてあるものを手でつかんでそこから引き離す」ことであるとしている。しかし、何を以て「手にする」かは、「肉を箸でとる」のように、「箸」が用いられることから、必ずしも「手」とは限らず、手にする手段については考察の余地がある。

次に、柴田・山田（2002）の講談社『類語大辞典』の意味記述を見る。

取る：①自分のほうに引き寄せて持つ。

②相手が支配していたり、別のところにあったりするものを、自分のところにもって来（て、自由に使えるようにす）る。

持つ：①手・指などを使って、そこからものが離れないようにする。

②人・性質・物・力などを離さず自分の勢力範囲内に置く。

トルとモツの意味記述①を見ると、あらゆるものが手にする対象になることがわかるが、「車」「家」のように物理的に手にすることができないものも存在するので、実際にはどのようなものにトルとモツが使われるのか不明瞭である。また、トルとモツの自分のものにする対象を適切に説明しているとは言いにくい。

また、トルの記述①は「自分のほうに引き寄せる」という記述がされており、〈自分の領域に移動させる〉という到着点が見られることがわかる。

- (1) 手に取る {もつ} と、ずっしりと重い。それもそのはず、外箱を外すと陶器のどんぶりが現れた。 (読売新聞 2010年8月5日)
- (2) 少し前に銀行ATMでお金を下ろしましたが他の考え事をしているうちにうっかりして下ろしたお金を機械から取る {×もつ} のを忘れて出てしまいました。 (BCCWJ)
- (3) かばんに大金を持つ {×とる}。 (日本語基本動詞用法辞典 2004: 507)

(1) と (2) の例文から、モツは手にする対象の存在点（トルの場合、移動対象の到着点）を表す「ニ格」と共起できるが、移動対象の起点を表す「カラ格」と共起しにくく、すなわち、手にする動作がトルと同様のものではないと言える。また、(3) の「かばんに～をもつ」はトルに置き換えられないことから、トルは自分のものにする対象の存在点を表す「ニ格」と共起しにくく、つまり、トルとモツの自分のものにするあり方が異なると考えられる。

本稿では、先行研究において不明瞭である「手にする」ことを表すトルとモツの動作、手段、対象及び「自分のものにする」ことを表すトルとモツのあり方、対象に関する類似点と相違点を明らかにし、意味記述の精緻化を行う。

3 トルとモツの意味分析

3.1 「手にする」

3.1.1 手にする動作

- (4) 冷蔵庫からジュースをとる {×もつ}。 (作例)

(5) 冷蔵庫からジュースをとってくる／もってくる。(作例)

「冷蔵庫から」は物理的移動の起点として場所を表し、ジュースの到着点が想定される。このことから、トルは手にする対象を物理的に移動させるという特徴があると考えられる。(5)のトルとモツは「くる」と組み合わせてテ形にすると、自然な表現になる。この場合の「くる」は手にする対象の移動ではなく、省略された主体(移動者)の移動を表す。なお、「上・下・横からモツ」の「カラ格」が示すのは対象の物理的移動の起点ではなく、手にする方向である。

- (6) 機械から部品をとり続ける。(作例)
- (7) 部品をそのままもち続ける。(作例)
- (8) 箸のとり方／箸のもち方 (作例)

「とり続ける」は何回も繰り返して機械から部品を一つずつ手にして移動させるという反復継続を表すが、「もち続ける」は部品をそのままずっと手にするという状態継続を表す。同じように「箸のとり方」は右手で箸を上から移動させ、左手で箸を受け、自分の方へ移す方法を表すが、「箸のもち方」は箸を指で動かし、食べ物を挟んだりつまんだりし、手にした状態を保つ方法を表す。以上のことから、トルは元あった場所から自分の領域への対象の物理的移動を表すが、モツは持続性があり、手にした状態の維持を表すことがわかる。

3.1.2 手にする手段

- (9) 肉を手・指・箸でとる／もつ。(作例)
- (10) お菓子をUFOキャッチャーでとる {×もつ}。(作例)
- (11) 荷物を肩・背中でもつ {×とる}。(作例)

トルの手段は「手」「指」「手・指と同じ機能をする道具」のように、対象を移動できる身体部分・道具である。ここで手・指と同じ機能をするのは、「箸」「UFOキャッチャー」のように、挟む・つまむ・曲げる・折り込む・丸めることができるということである。一方、モツの手段は「手」「箸」「肩」「背中」のよ

うに、落下させないように手にした状態を維持できる身体部分・道具である。

3.1.3 手にする対象

- (12) 手渡された荷物を手にとってもつ {×もってとる}。(作例)

「とってもつ」では、トルは「手に」という到着点があり、荷物を他人の手から自分の手へ移動させること、モツは荷物を手にした状態を維持することを表すと考えられる。一方、「もってとる」は先に荷物を手にした状態を維持してから他人の手から自分の手へ移動させることは不可能なので、非文になる。

つまり、トルの手にする対象はそれまで手にしていなかったものであり、元あった場所から自分の領域へ移動させることが可能な具体物であるが、モツの手にする対象にはそれまで手にしていなかったものという限定はなく、手にした状態の維持を継続することが可能な具体物である。

3.1.4 「手にする」意味を表すトルとモツの違いと意味記述

表1 「手にする」意味を表すトルとモツの違い

	手にする動作	手にする手段	手にする対象
トル	元あった場所から自分の領域への対象の物理的移動	対象を移動できる身体部分・道具	元あった場所から自分の領域へ移動させることが可能な具体的対象
モツ	対象を手にした状態の維持	対象を手にした状態を維持できる身体部分・道具	手にした状態の維持を継続することが可能な具体的対象

トルとモツの手にする手段と手にする対象は手にする動作によって限定される。すなわち、手にする手段と手にする対象は、トルの「移動できる」という機能・特徴とモツの「状態を維持できる」という機能・特徴があれば、どのような手段・対象でも良い。手にする手段と手にする対象は本質的な問題ではなく、手にする動作に集約されると言える。

トル：〈主体が〉〈身体部分(または道具)で〉〈具体的対象を手にして〉

〈元あった場所から自分の領域へ〉〈物理的に移動させる〉
 モツ：〈主体が〉〈身体部分（または道具）で〉〈具体的対象を手にして〉
 〈継続的に〉〈手にした状態を維持する〉

必要がある。 (作例)

3.2 「自分のものにする」

3.2.1 自分のものにするあり方

- (13) 親の口座から大金をとる {×もつ}。 (作例)
 (14) 自分の口座に大金をもっている {×とっている}。 (作例)

互いに置き換えられないことから、トルとモツは大金の自分のものにするあり方が異なると考えられる。〈自分のものにする〉プロセスのどの段階にあるのかといった観点からみると、「口座からとる」は大金の元の在処を表す「カラ格」と共起しやすく、主体が自分のものにしていない状態から自分のものにしていく状態への変化の段階にあるが、「口座にもっている」は大金の存在点を表す「ニ格」と共起しやすく、主体が既に自分のものにしていく段階にあると言える。

- (15) 映画の仕事との両立が難しいことを理由に休学していたが、卒業して学位を取る {×もつ} ことを目指しているという。
 (朝日新聞 2012年10月24日)
 (16) 米国の25-34歳では、大学の学位を持っている {×とっている} 人の数は男性より女性の方が多い。
 (朝日新聞 2013年1月22日)

「学位をとる」は取得を目指しているので、学位をまだ自分のものにしていないことを表すが、「学位をもっている」は学位を既に自分のものにしていくことを表す。つまり、トルは主体が対象を自分のものにしていく《獲得性》を表すが、モツは主体が対象を持続的に自分のものにしていく《継続性》を表す。

- (17) 期末テストで100点をずっととり続ける。 (作例)
 (18) チャンピオンベルトをもち続けるためには、次の争奪戦でも勝利する

「とり続ける」は100点の獲得を目標とし、毎回の期末テストで繰り返して自分のものにしていくという反復継続を表すが、「もち続ける」は一回でチャンピオンベルトを獲得し、次の争奪戦でもそのまま自分のものにしていくという状態継続を表す。つまり、トルは自分のものにする対象の獲得・取得目標に焦点があるが、モツは対象を自分のものにしていく状態維持に焦点がある。

3.2.2 自分のものにする対象

- (19) 志望会社から内定をとる {×もつ}。 (作例)
 (20) 泥棒が金庫から金をとる {×もつ}。 (作例)

(19) では「内定」と、基本的には主体が獲得・取得を目標とするものであるが、(20) の「金」のように他人の所有物である場合もある。いずれも〈主体が獲得・取得を目標とし、自分のものにしていく対象〉であることがわかる。

- (21) 内定を一つでももっている {×とっている} と面接に有利だ。 (作例)
 (22) 三ヶ月になる息子を持つ {×とる} 母です。 (BCCWJ)

「内定」は既に自分のものにしていく対象であり、「息子」は親から「所有物」としても見なされやすい人間であると考えられる。つまり、モツの対象の特徴は、〈主体が自分のものにした状態を継続的に維持する対象〉であると言える。

3.2.3 「自分のものにする」意味を表すトルとモツの違いと意味記述

表2 「自分のものにする」意味を表すトルとモツの違い

	自分のものにするあり方	自分のものにする対象
トル	主体が対象を自分のものにしていく《獲得性》	獲得・取得を目標とし、自分のものにしていく対象
モツ	主体が対象を持続的に自分のものにしていく《継続性》	自分のものにした状態を継続的に維持する対象

トルとモツの自分のものにする対象は自分のものにするあり方によって限定される。すなわち、自分のものにする対象は、トルの《獲得性》とモツの《継続性》があれば、どのような対象でも良い。

トル：〈主体が〉〈獲得・取得を目標として〉〈対象を自分のものにしよ
とする〉

モツ：〈主体が〉〈対象を自分のものにしていてる状態を〉〈継続的に維持す
る〉

3.3 「手にする」意味と「自分のものにする」意味の関連性

3.3.1 トルの「手にする」意味と「自分のものにする」意味の関連性

(23) 少し前に銀行ATMでお金を下ろしましたが他の考え事をしているうち
にうっかりして下ろしたお金を機械から取るのを忘れて出てしまいま
した。 (2)再掲

(24) 「ブラック企業」とは人をだまして金をとる仕事。 (作例)

(23) の「金をとる」は、下ろした金を手にし、起点である機械から到着点である自分の領域へ移動させることを表し、空間的な移動を通して手にするという意味である。一方、(24) の「金をとる」は、起点である人から到着点であるブラック企業へ金の所有権を移動させることを表し、抽象的な移動を通して自分のものにするという意味である。(24) の「金をとる」は、「手にして自分の領域へ移動させる」という実際の動作があり、その動作を比喩的に使用し、「自分のものにする」という意味に転用させている。よって、「手にする」意味と「自分のものにする」意味では、空間的な移動から、抽象的な移動へと意味が拡張していると考えられるため、メタファーに基づく関係が成り立っていると考えられる。

3.3.2 モツの「手にする」意味と「自分のものにする」意味の関連性

(25) 両手にバッグを持って商店街を振り返らずに歩いてゆく。 (BCCWJ)

(26) 女子大生になると、結構ブランド物のバッグを持っている人も多くな

ってくるようです。

(<http://design-dtp.net>)

「バッグをもつ」は、両手にバッグを手にし、バッグを手にした状態を継続的に維持するという意味であるが、「ブランド物のバッグを持っている」は、バッグを自分のものにし、バッグを自分のものにした状態を継続的に維持するという意味である。(26) の「バッグをもつ」は、「実際に手にし、手にした状態を継続的に維持する」という実際の動作があり、その動作を比喩的に使用し、「自分のものにした状態を継続的に維持する」という意味に転用させている。よって、「手にする」意味と「自分のものにする」意味では、「状態を継続的に維持する」という共通点に基づく、空間的な手にした状態から抽象的な自分のものにした状態へと意味が拡張しており、メタファーに基づく関係が成立していると言える。

3.4 トルとモツのイメージ図式

国広(1994)で提唱されている「現象素」の考えを援用し、「手にする」と「自分のものにする」の意味概念を以下のようなイメージ図式で示す。



図1 トルのイメージ図式

図1において、トルは「自分の領域へ移動させる」ことに焦点があると思われる。つまり、「手にする」意味を表すトルは主体が対象を手にして「元あった場所から」「自分の手にする領域へ」物理的に移動させること、「自分のものにする」意味を表すトルは主体が対象の所有権を「所有権の起源から」「自分のものにする領域へ」抽象的に移動させるということになる。

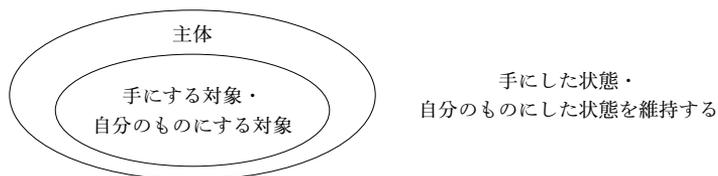


図2 モツのイメージ図式

一方、図2からもわかるように、モツは「状態を継続的に維持する」ことに焦点がある。つまり、「手にする」意味を表すモツは主体が対象を手にし、手にした状態を継続的に維持すること、「自分のものにする」意味を表すモツは主体が対象を自分のものにした状態を継続的に維持するということになる。

4 おわりに

今後は、ツカム、ニギル、ツمام、ハサムなどの「手にする」ことを表す動詞についても広く考察し、ツカムとニギルの類義語分析を進めていきたい。

〈名古屋大学大学院生〉

参考文献

- 国広哲弥 (1994) 「認知的多義論一現象素の提唱一」『言語研究』106, pp.22-44. 日本言語学会
 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (2004) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
 柴田武・山田進 (2002) 『類語大辞典』講談社

例文出典

- 新聞ホームページの記事検索 (www.asahi.com, www.yomiuri.co.jp)
 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (2012年度版)』(BCCWJ)